

## 6) 沖曳網採捕により把握したフナ稚魚の分布状況

太田滋規・岩崎治臣

【背景・ねらい】ニゴロブナは琵琶湖漁業の重要魚種であるが、近年漁獲量が激減している。そのため、ニゴロブナの資源管理型漁業を推進する必要がある。しかし、資源管理に必要とされる基礎的な知見は乏しく、琵琶湖での稚魚の動向は明らかではない。そこで、沖曳網採捕により稚魚の分布状況を把握した。

【成果の内容・特徴】冬期のニゴロブナの分布状況を把握するため、平成5年1月に琵琶湖全域で水深別の沖曳網操業による採集調査を行った(図1)。調査地点は海老江沖から今津浜沖、近江町沖から新旭町沖、新海沖から明神崎沖、長命寺沖から南比良沖、雄琴沖から和邇沖のそれぞれの線上に水深10mごとに各1地点、合計48地点を設定した。採集した標本は帰場後、外部形態により種を判別し、それぞれの採集尾数と総重量を計測した。フナ類は採集した全ての個体の体型測定を行った。ニゴロブナは1,176尾採集され、標準体長は41.6mm~209.0mmで度数分布のピークは70~80mmにみられた。1曳網あたりのニゴロブナの採集尾数を水深別にみると、水深20mと30mの地点では1尾未満、40mでは1尾、50mでは5尾、60mでは9尾、70mでは107尾、90mでは10尾となった。また、1曳網で20尾以上採集された場所は、竹生島の北側や琵琶湖西岸部のいずれも急深になっている場所であった。そこで、琵琶湖西岸部で急深となっている、針江沖から鴨川沖の水深70mの5地点を調査したところ、1曳網あたり163尾採集され、この時期のニゴロブナが多く生息する場所を確認した。

次に、秋期から冬期にかけてのニゴロブナの動向を把握するために、平成5年10月から平成6年1月まで約1ヶ月毎に、近江町沖から新旭町沖に至る線上に水深10mごとに各1地点、計11地点で沖曳網操業による採集を行った(図2)。10月、11月は水深70m以浅では数尾程度の採集であり80m以深では採集されなかった。12月にはほぼ全地点で採集され、新旭町沖の水深70m地点では602尾と多く採集された。1月には水深60m~80mの地点で多く採集され、新旭町沖の水深70m地点では77尾と他の地点に比較して多く採集された。このように冬期になると新旭町沖の水深70m地点では、他所に比較してニゴロブナが多く集まると思われた。

これらのことよりニゴロブナは、冬期には琵琶湖全域に生息しているが、湖北部や琵琶湖西岸部の急なかけあがりとなっている水深70m前後の所に集まっているものと考えられる。

【成果の活用面・留意点】今回の調査により把握した、冬期にニゴロブナが集まる場所を定点として、今後、定点調査を継続することによりニゴロブナの資源量の推定や漁況予測の基礎資料とする。また、フナ稚魚はモロコ等を対象にした沖曳網漁によりまとまって混獲されるおそれがあり、これらの有効な再放流の方法を確立する必要がある。

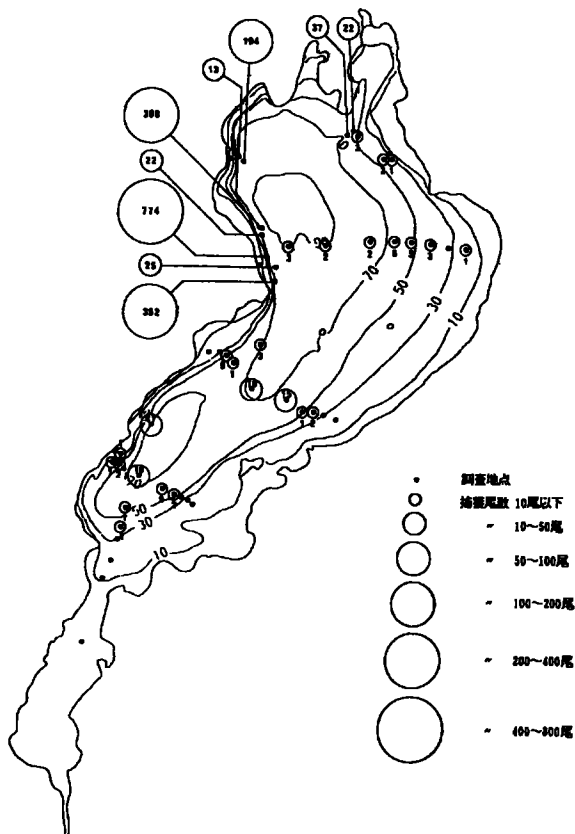


図1 沖曳網調査による調査地点とニゴロブナ採集尾数

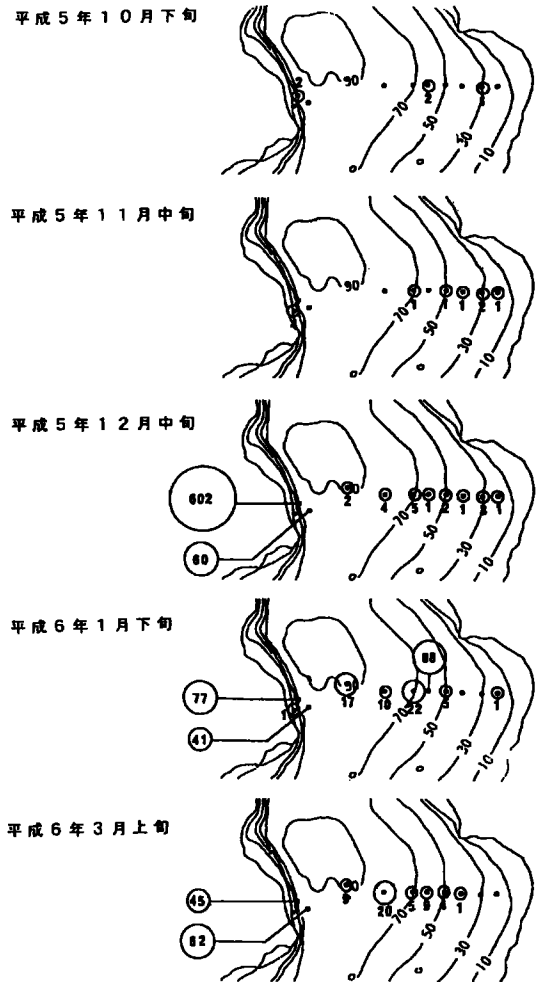


図2 秋期から冬期の沖曳網による定点調査のニゴロブナ採集尾数